

## 運動を指導する際の擬音語・擬態語に関する基礎的研究

兵庫教育大学 生活・健康系教育講座 松下健二  
兵庫教育大学 学校教育学部附属中学校 藤田定彦

### 1. 緒言

日々の授業において教師は、様々な情報を用いながら教授活動を展開している。体育の授業では、言語的情報、視覚的情報、運動感覚的情報、あるいはこれらを組み合わせた情報を用いることによって体育独自の教授活動やコミュニケーション活動が展開されている<sup>4)</sup>。

そのうちでも言語的情報に着目すると、体育の教授—学習過程において運動指導をする際には、望まれる運動成果を学習者から引き出すために、運動の師範と共に種々の「指導ことば」が投げかけられる。「指導ことば」は(1)直示のことば(2)比喩のことば(3)擬音語・擬態語(4)その他の4つに分類されるが特に(2)比喩のことばと(3)擬音語・擬態語は学習者に分かりやすく、運動イメージを喚起させやすいとされている<sup>2) 3)</sup>。

特に擬音語・擬態語は合目的な動作を習得させる際、教師が意識的、無意識的によく使用している。しかし擬音語・擬態語による指導のポイントの理解や取得は、学習者の受容処理の仕方のよって指導者の意図したものとは異なったものになる。佐川ら<sup>6)</sup>は自己の使用する擬態語とそれが表すイメージについて調査し、教員と男子学生ではほぼ同じ傾向でイメージ化するの比して女子学生では異なることを指摘している。

実際の運動学習場面を考えた場合、擬音語・擬態語は教師から学習者に与えられる場合がほとんどであり、それらは①教師から擬音語・擬態語を言葉のみで与えられた場合、②示範をしめされた際に与えられた場合などである。一般に教師は自分の使用したものと同じ擬音語・擬態語で学習者も運動イメージを想起していると考えている。しかしながら学習場面で条件が異なると学習者の受容処理も一定したものではなくなると考えられ、擬音語・擬態語が使用される条件の違いによって運動に対するイメージがどのように変化するかは明らかにされていない。また擬音語・擬態語は感性経験によって自己のなかに作り出されるものであり、その条件によって地方差や年齢差がみとめられる<sup>1)</sup>。この

ことは、学習者の感性経験の内容や量によって擬音語・擬態語も質的にも量的にも変化することを示唆している。

そこで本研究では、運動を指導する際に用いられている擬音語・擬態語のうち、特によく使用されている擬音語・擬態語をとりあげ、①擬音語・擬態語と運動イメージとの対応関係、②一運動場面を異なった擬音語・擬態語で表現した場合に想起されるイメージの違い、これに加えて③一運動場面を図示した場合に想起される擬音語・擬態語の3点について、年齢の差や想起条件の差異などから擬音語・擬態語と運動イメージとの関係を明らかにした。

## 2. 方法

### アンケート調査

#### (1) 目的

擬音語・擬態語と運動形態のイメージとの関係を明らかにするため、教師と児童・生徒・学生の各帰属集団に対して次の3点についての回答を求めた。

- ①擬音語・擬態語を文字のみで表現した場合に想起される運動イメージ
- ②運動場面について表現した擬音語・擬態語を示された場合に、それぞれの擬音語・擬態語からどのようなイメージがなされるか
- ③図示された一運動場面に対して、自己の擬音語・擬態語で表現することを求められた場合について

#### (2) 対象

各帰属集団におけるイメージの差の有無について検討するため、小学校6年生から教師にいたる6群で調査を行った。アンケートの回答を得た人数は以下のとおりである。

小学校6年生	53名
中学校2年生	115名
高等学校1年生	121名
大学1回生	78名
大学3回生	76名
教師	58名
計	501名

大学生はH教育大学の学生である。3回生は教育実習を経験した者を選び、実習を経験していない1回生と比較するため対象に加えた。

### (3) アンケート調査の内容

1) 擬音語・擬態語と運動形態のイメージの対応関係を明らかにするため、資料1に示すように17種類の擬音語・擬態語と運動形態を表す11種類の言葉を提示し、それぞれの擬音語・擬態語からイメージされる言葉を線で結ばせた(資料1)。

2) 一運動場面を異なった擬音語・擬態語で表現した場合に想起されるイメージの違いを明らかにするため、擬音語・擬態語が指導の際に多く用いられている個人種目の内、陸上運動のハードル走の踏み切り部分を図示し、3種類の擬音語・擬態語で動きを表現して、それぞれの擬音語・擬態語によって想起されるイメージを記述させた(資料2)。

3) 一連の運動場面を図示した場合に、どれくらいの擬音語・擬態語が想起されるかを知るため、陸上運動と同様に個人種目で、擬音語・擬態語が多く用いられている器械運動の内、鉄棒運動の前方支持回転の一回転を図示し、回答者が想起した擬音語・擬態語を記述させた(資料3)。

### 3. 結果ならびに考察

擬音語・擬態語は音、声、動作、状態、心理作用などを非意味的な音で描写するものであり、単に音を表す場合は擬音語であり、状態を表す場合は擬態語である。しかしながら同一音でも運動イメージをどうとらえるかによって擬音語にも擬態語にもなる。そこで本研究では両者を分けずに擬音語・擬態語として取り扱うことにした。

#### (1) 擬音語・擬態語を文字のみで表現した場合に想起される運動イメージ(アンケート調査1)

アンケート調査1では、擬音語・擬態語が持っていると思われる運動イメージを明らかにすることを目的とした。そのために、17種類の擬音語・擬態語を提示し、運動の強さや形態を表す言葉と線で結ばせた。そして回答を集計し、それぞれ左から数値の多かった順に並べた。(表1)

表1 文字で表した擬音語・擬態語から想起された運動イメージ

タン	： 軽い・素早い
ターン	： ゆっくり・浮く・浮いている
タッ	： 素早い・速い
トン	： 軽い・弱い
トーン	： ゆっくり・軽い・浮いている・浮く
ピヨン	： 軽い・弱い
ピヨーン	： 浮いている・浮く・軽い
ポン	： 軽い・弱い
ポーン	： 浮く・浮いている・ゆっくり・軽い
パッ	： 素早い・速い
バン	： 強い・きつい・重い
バーン	： 強い・きつい・重い
ダン	： 強い・きつい・重い
ダッ	： 素早い・速い・強い
フワーン	： 浮いている・浮く・柔らかい

ヒューン： 速い・素早い

ただし、ビョーンについては、数多くの選択がなされており、代表するようなものは把握できなかった。

ビョーンを除く16種類の擬音語・擬態語は、年齢の多少に関係なく、いずれの群においてもこのような2～4種類の言葉でイメージされており、イメージが1つの言葉で集約された擬音語・擬態語は認められなかった。

この結果から

①擬音語・擬態語相互でそのイメージが類似していると思われるものが3種みられた。

・バン、バーン、ダンといった濁音では「強い」「きつい」「重い」というイメージがなされていた。

・パッ、タッといった促音では、「素早い」「速い」というイメージがなされていた。

・ポーン、トーン、といった長音では、「浮く」「浮いている」「ゆっくり」「軽い」というイメージがなされていた。

②清音と濁音の違いが、イメージの差に表れていた。

・促音であるタッ・パッ・ダッにおいて、「素早い」「速い」という共通イメージのほかに、濁音であるダッにのみ「強い」というイメージがみとめられた。

・タンとダンにおいても、清音であるタンが「軽い」「素早い」イメージであるのに対し、ダンは、「強い」「きつい」「重い」というイメージであった。

擬音語・擬態語は清音、濁音、半濁音、に分類され、それぞれ長音、短音、撥音、促音で表現される。辞典<sup>1)</sup>ではこれらの組み合わせと運動イメージを明確に分類していないが、具体的な擬音語・擬態語の「意味」の文章の中に運動イメージを表す言葉が見られ、今回使われた運動イメージと同一でないものの意味的には通ずるもので説明がなされていた。また語音と運動性の緩速の関連性は、運動性の速い順に母音ではi - a - e - o - uとなり、子音ではk, t, ch, p, が速い音, r, nが緩慢な音であり<sup>5)</sup>, これらを参考にすると、擬

音語・擬態語と運動イメージとの関連性にはほぼ同様の結果が認められた。

調査前には、教師と児童・生徒の間にイメージに差があるのではないかと予想されたが、6群ともほぼ同様の結果がみとめられた。

このことから、アンケート調査1のように擬音語・擬態語を文字のみで表現した場合には、教師も児童・生徒・学生もほぼ同じようにイメージしているものと考えられる。

(2) 運動場面について表現した擬音語を示した場合にみられたイメージ  
(アンケート調査2)

アンケート調査2では、1つの運動場면을異なる擬音語・擬態語で表現した場合に、どのようなイメージが想起されるかを明らかにしようとした。そのために、陸上運動のハードル走の踏み切り場면을図示し、タッ、バッ、バーンの3つの擬音語・擬態語を提示して、それぞれの擬音語・擬態語から、踏み切り動作がどのようにイメージされるかを調査した。回答の種類が非常に多かったので、次の基準で回答を3種類に分類し表2にまとめた。

分類 1：擬音語・擬態語から、明確に運動がイメージされているもの。(軽い、強い、素早い、ゆっくり等の言葉が含まれているもの)

分類 2：多少あいまいであるが、運動がイメージされているもの。(力いっぱい、おもいきり、力をぬいて、等)

分類 3：運動がイメージされたと考えられないもの。(こけた、跳んだ、失敗した、等)

表2 「タッ」と表現した踏み切り

	分類 1	分類 2	分類 3
小 6 (%)	39 (73.6)	5 (9.4)	9 (17.0)
中 2 (%)	75 (65.2)	2 (1.7)	38 (33.1)

高 1 (%)	87 (71.9)	7 (5.8)	27 (22.3)
大 1 (%)	62 (79.5)	2 (2.6)	14 (17.9)
大 3 (%)	53 (69.7)	10 (13.2)	13 (17.1)
教師 (%)	41 (70.7)	2 (3.4)	15 (25.9)
X (%)	71.8	6.0	22.2
S D	4.3	4.1	5.8

分類1の回答が平均で70%をこえていることから「タッ」という音で踏み切りを表現した場合には、運動が年齢に関係なく明確にイメージしやすいと推察される。

表3 「バッ」と表現した踏み切り

小 6 (%)	39 (73.6)	5 (9.4)	9 (17.0)
中 2 (%)	31 (27.0)	35 (30.4)	49 (42.6)
高 1 (%)	47 (38.8)	25 (20.7)	49 (40.5)
大 1	37	14	27

(%)	(47.4)	(18.0)	(34.6)
大3 (%)	30 (39.5)	17 (22.4)	29 (38.2)
教師 (%)	29 (50.0)	8 (13.8)	21 (36.2)
X (%)	40.4	20.7	38.9
S D	7.4	5.1	2.9

平均でみると分類1と3の回答の割合がほぼ同じである。  
このことから、「バッ」という音で踏み切りを表現した場合には、明確なイメージを持てるものと持てないものが同程度いると考えられ、受け取るイメージにかなりの個人差があると推察される。

表4 「バーン」と表現した踏み切り

小6 (%)	13 (24.5)	27 (51.2)	13 (24.5)
中2 (%)	28 (24.3)	37 (32.2)	50 (43.5)
高1 (%)	32 (26.4)	39 (32.2)	50 (41.3)



大 1 (%)	24 (30.8)	28 (35.9)	26 (33.3)
大 3 (%)	28 (36.8)	30 (39.5)	18 (23.5)
教師 (%)	33 (56.9)	13 (20.7)	12 (20.7)
X (%)	33.3	35.2	27.8
S D	11.4	8.7	7.2

分類1の割合が経年齢的に高くなっている。このことから、「バーン」という音は、年齢が低いうちは運動がイメージしにくく、経験を積んでいくうちにイメージしやすくなる音であると考えられる。教師と小6では、32.4%もの差がみとめられた。分類1の割合が「タッ」、「バッ」、「バーン」の順に小さくなっていたことは、清音系-短音・促音→濁音系-短音・促音→濁音系-長音・撥音の順に擬音語・擬態語から運動をイメージすることが困難なことを表している。

次ぎに分類1の回答から抽出した主要なイメージを数値の多い順にとりあげ、年齢別に分類した(表5, 6, 7)。

表5 「タッ」と表現した踏み切り (括弧内の数字は回答割合を示す)

	小 6	中 2	高 1	大 1	大 3	教師
1	軽い (34.0)	軽い (42.6)	軽い (47.1)	軽い (57.7)	軽い (47.4)	軽い (34.5)

2	速い (13.2)	素早い (10.0)	素早い (13.2)	素早い (11.5)	素早い (9.2)	素早い (24.1)
3	素早い (0.8)	速い (7.0)	軽く 素早い (5.8)	軽く 素早い (9.0)	軽く 素早い (7.9)	軽く 素早い (6.9)

表6 「バッ」と表現した踏み切り (括弧内の数字は回答割合をしめす)

	小 6	中 2	高 1	大 1	大 3	教師
1	速い (15.1)	強い (11.3)	強い (18.2)	強い (20.5)	強い (21.1)	強い (26.0)
2	強い (9.7)	素早い (8.7)	素早い (13.2)	素早い (11.6)	素早い (9.2)	素早い (8.6)
3	素早い (9.7)	速い (5.2)	速い (6.6)	速い (6.4)	強く 素早い (7.9)	強く 素早い (8.6)

表7 「バーン」と表現した踏み切り (括弧内の数字は回答割合をしめす)

	小 6	中 2	高 1	大 1	大 3	教師
1	ゆっくり (11.3)	強い (13.1)	強い (17.4)	強い (20.5)	強い (30.3)	強い (55.2)

2	強い (5.7)	ゆっくり (7.0)	ゆっくり (8.3)	ゆっくり (5.1)	ゆっくり (3.9)	強く 速い (3.4)
3	遅い (3.8)	軽い (1.7)	強く ゆっくり (4.1)	強く 速い (5.1)	強く 速い (5.1)	遅い (1.7)

「タッ」と表現した踏み切りは「軽い」「素早い」, 「バッ」は「強い」「素早い」, 「バーン」は「強い」「ゆっくり」とイメージされており, 異なる擬音語・擬態語を用いて運動を表現すると, 想起される運動のイメージも異なることが明らかになった. また, 主要なイメージについては, 多少順序が入れ替わっているものもあるが, 全体としてみると年齢の違いによる差異は認められなかった.

主要なイメージについての年齢差は認められなかったが, 回答の記述を細かくみると, 高校生以下と大学生及び教師では記述内容に違いが認められる. 代表的な回答内容を以下に示した.

表8 アンケート2の回答内容

高校生以下	「軽く踏み切る」 「力強い」 「ゆっくりとぶ」
大学生以上	「リズムよく助走し, 軽く踏み切る」 「スピードにのった助走から, 足の裏全体で力強く踏み切る」 「腕をリズムカルに振って, つま先で素早く踏み切る」

大学生及び教師の回答からは、単に「素早い」「強い」「軽い」というだけでなく、踏み切りにかかわるさまざまな動きが記述されており、運動がより具体的に表現されている。このことから、大学生及び教師の方が、豊富な運動経験や指導経験をもとに、擬音語・擬態語からより具体的な運動のイメージが想起できるものと考えられる。

ここで取り上げた3種の擬音語・擬態語のうち、「タッ」と「バーン」はアンケート1でも調査しているので、結果を比較した。「タッ」に関しては、アンケート1では「素早い」が大半を占めていたが、2では「軽い」が「素早い」よりも多くなっていた。「バーン」についても1ではほとんど見られていない「ゆっくり」が、2では「強い」の次に多く見られていた。同じ擬音語・擬態語でありながら結果が異なったのは、文字のみで表したアンケート1と、運動場面を図示したアンケート2の内容の違いによるものと推察される。このことから、想起条件が異なるとイメージも変わることが認められた。

### 3. 図示された運動の一場面に対する擬音語・擬態語による表現（アンケート調査3）

アンケート3では、1つの運動場面からどれくらいの種類の擬音語・擬態語が想起されるかを明らかにしようとした。そのために、鉄棒運動の前方支持回転における1回転を図示し、回答者のもつ擬音語・擬態語で表現させた。

まず、得られた回答を種類別に表に示した（表9）。

表9 各群における擬音語・擬態語の種類数および回答総数

	種類数	回答総数
小 6	48	53
中 2	73	115
高 1	69	121
大 1	55	78

大 3	4 7	7 6
教 師	3 9	5 3

さほど複雑な運動とは思われない鉄棒の回転について、表にみられるごとく、非常に多く回答が得られた。また、回答には「クルッ」、「クルン」、「ビューン」のように1回転を1つの音で表現したものと、「クルン・サッ」、「グルン・グッ」のように回転を前半と後半に分け、2つの音で表現したものがみられた。そこで、前方支持回転における1回転を1つの音で表したものを回答1、回転を前半と後半に分けて2つの音で表現したものを回答2として2つに分類した。

回答1の割合が高いのは高1（51.2%）、大1（50.0%）、大3（47.4%）、回答2の割合が高かったのは小6（52.8%）、中2（53.9%）、教師（55.2%）であった。特に教師において回答2が回答1よりも17.3%も多くみられた。

次に、回答1における清音と濁音との比率を求めると小6（52.0%）、中2（64.0%）、高1（62.9%）、大3（58.3%）では、清音で表した回答が濁音より16～28%多くなっているが、大1及び教師ではほぼ同じ割合を示した。また小6にのみ半濁音による回答がみられた。

さらに、回答1を種類別に分類し、各年齢層にわたって得られた代表的な擬音語・擬態語を集計した（表10）。

表10 各年齢層で得られた代表的擬音語・擬態語（回答1）

	小6	中2	高1	大1	大3	教師
クルッ	3	7	10	10	5	4
グルン	1	8	5	6	5	3
クルン	1	3	6	4	7	2

クル	0	9	3	1	2	1
クルリ	1	5	6	0	1	0
グルーン	1	1	2	2	1	3
グルッ	2	0	1	2	2	0
クルリン	1	0	3	0	1	1
ビューン	0	1	2	1	1	1

以上の9種類を取り上げたが、最も多くみられたクルッでも、大1の回答にしめる割合は12.8%，回答全体では7.8%でしかなく、この結果からも回答の種類が非常に多いことがうかがえる。

次に、回答2の分類集計をおこなった

表 11 回答2における清音と濁音・半濁音の組み合わせ

	清・清	清・濁	清・半濁	濁・清	濁・濁	濁・半濁
小 6	12	5	1	6	2	1
中 2	31	6	3	4	15	3
高 1	17	7	3	5	10	3
大 1	10	10	1	6	10	1
大 3	6	9	7	9	3	1

教 師	12	7	1	5	6	1
-----	----	---	---	---	---	---

回答2では、一般に前半清音・後半清音の組み合わせが最も多くみられ、次いで清・濁、濁・濁となった。

回転前半は回答1にみられるものと同じような擬音語・擬態語が多く用いられていたが、後半の音は、「サッ」「パッ」など促音が多くみられた。

次に、回転後半を促音で表した回答を集計した（表12）。

表12 後半を促音で表した回答

	促音で表したもの	それ以外のもの
小 6	13 (46.4)	15 (53.6)
中 2	21 (33.9)	41 (66.1)
高 1	19 (42.2)	26 (57.8)
大 1	26 (68.4)	12 (31.6)
大 3	26 (74.3)	9 (25.7)
教 師	26 (81.3)	6 (18.7)

注・（ ）内の数字は割合を表す

促音で表されたものの割合は加齢的に大きくなる傾向がみられ、学生及び教師では約70～80%が後半を促音で表していた。

促音は、素早い、速いなどにイメージされる音であるが、このことは、回転の後半は小さく回るといふ、前方支持回転の運動構造と一致しており、大学生や教師の方が、運動を表現する際に、より適切な擬音語・擬態語を用いていた。

#### 4. 要 約

運動を指導する際に使用される擬音語・擬態語をとりあげ、3種の想起条件（2種は与えられた擬音語・擬態語から運動イメージを想起させる、1種はさきに運動イメージをあたえられ、それに対する擬音語・擬態語を想起させる）を小・中・高校生・大学生・教師に与え、得られた回答から主として年齢差の面から擬音語・擬態語と運動イメージとの関係を明らかにした。

（1）擬音語・擬態語を文字のみで表現した場合に想起される運動イメージは、主として2～4種類の言葉によってあらわされた。また、各帰属集団（年齢差）の運動イメージに大きな差異はみとめられなかった。

（2）異なる擬音語・擬態語で1つの運動場面を表現した場合に想起される運動イメージには帰属集団間に差異がみとめられ、清音系→短音・促音→濁音系→短音・促音→濁音系→長音・撥音の順に年齢に伴い運動をイメージするのが困難になることが認められた。しかし運動イメージとして認められたものの主要なものには著しい差異はみられなかった。

（3）主要運動イメージの記述内容に差異がみられ、高校生以下では、力の強弱や速度の緩速などを短的に述べているのに比して大学生以上では運動を具体的な言葉で記述しており、運動構造の理解の差によるものと考えられた。

（4）1つの運動場面から運動イメージを表現する際、各帰属集団ともに非常に多くの種類の擬音語・擬態語を想起しており、教師及び大学生の方が、より運動構造を正確にとらえた擬音語・擬態語で表現していた。

（5）(2)(3)(4)における教師及び大学生と児童・生徒との差異は、運動経験や指導経験による運動構造や運動感覚の把握の程度の差に起因するものと考えられ、擬音語・擬態語に対する運動イメージに運動経験が大きく影響することが示唆された。



## 参考文献

- 1) 浅野鶴子, 「擬音語・擬態語辞典」, 角川小辞典-12, 浅野鶴子編, 金田一春彦解説, 角川書店, 1978, p2.
- 2) 片岡康子, 「イメージと動きを引き出す指導ことばのあり方」, 学校体育, 第40巻 第13号, 1987, pp127-130.
- 3) 児玉耕平, 「ボール運動(球技)の楽しさを味わわせる指導ことばのあり方」, 学校体育, 第39巻 第12号, 1986, pp14-20.
- 4) 丸山真司, 「体育授業のコミュニケーションにおける比喩的表現の体育教授学的意義-比喩表現の役割と位置づけ-」, 日本教科教育学会, 第14巻第1号, 1989, pp25-33.
- 5) 松岡 武, 「2言葉と象徴」, コトバの科学3 コトバの心理, 中山書店, 1958, pp130-148.
- 6) 佐川和則, 児玉公正, 川合 悟, 田原武彦, 浜口雅行, 津田忠雄, 入川松博, 志水正俊, 「身体運動と言語〈Ⅲ〉-教員と学生の擬態語のイメージ化について-」, 大阪体育学研究, No. 27 (Supplement), 1989, pp15.

資料(1)

左下にある言葉が持っていると思われるイメージと最も合うものを、右下の語群から選び、線で結んで下さい。同じものに何本結んでもかまいません。

- |      |   |              |
|------|---|--------------|
| タン   | ・ |              |
| ターン  | ・ |              |
| タッ   | ・ | ・ 浮いているような感じ |
| トン   | ・ | ・ 強い感じ       |
| トーン  | ・ | ・ すばやい感じ     |
| ピョーン | ・ | ・ 弱い感じ       |
| ポン   | ・ | ・ ゆっくりした感じ   |
| ポーン  | ・ | ・ きつい感じ      |
| ハッ   | ・ | ・ 浮くような感じ    |
| ピョン  | ・ | ・ 重い感じ       |
| バン   | ・ | ・ 軽い感じ       |
| バーン  | ・ | ・ やわらかい感じ    |
| ダン   | ・ | ・ 速い感じ       |
| ダッ   | ・ | ・ 上記にある以外の感じ |
| フワーン | ・ | (どのような感じですか) |
| ビョーン | ・ | ( )          |
| ヒューン | ・ |              |

資料(2)

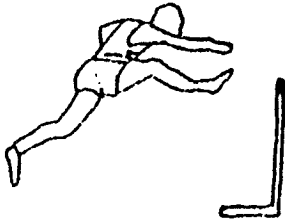
例を参考にして以下の質問に答えて下さい。

(例)次にあげる言葉で短距離走の腕のふりを表した場合、どのような腕のふりがイメージされますか。

シュッシュュ (楽に腕をはやくふる感じ )

ビュッビュ (腕を前後に思いっきりふるような感じ )

次にあげる言葉でハードルの踏み切り場面を表した場合、どのような踏み切りがイメージされますか。



タッ ( )

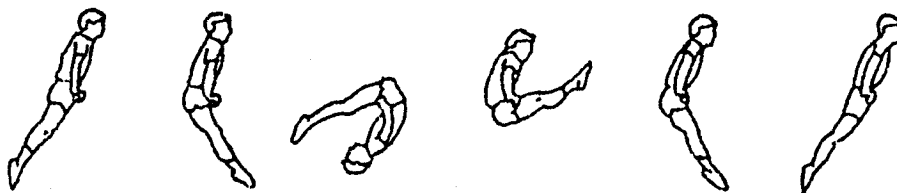
バッ ( )

バーン ( )

資料(3)

器械運動 (鉄棒の腕立て前まわり)

鉄棒に上がってからの1回転を音で表して下さい。



( )